

# 471,691 円の義援金が集まりました。ありがとうございました。

## チャリティー展・ぼろ市 報告新聞

2014.10.16  
洋画研究室



▲募金箱と商品のブルータス

### 第四回東日本大震災被災者支援 チャリティー展開催

2014年7月16日(水)・21日(月・祝)にかけて女子美術大学内で洋画研究室主催の(教員、大学院生、修了生)による第4回「東日本大震災被災者支援チャリティー展」を開催しました。今年のチャリティー展は展示とぼろ市と2本立てです。展示では油彩画、版画やデッサンのような小作品、オブジェ等を展示販売しました。開催期間終盤の7月20日(日)、7月21日(月)は作品を販売するだけでなく、各研究室で使われなくなった備品や書籍、画材(ポロト命名)を寄付頂き、来場者の募金(ポロト)と交換する「ぼろ市」も運営することができました。

皆様の協力で四十七万六千九百九十一円が集まりました。その数字は簡単に集まるものではありません。被災地に対して自分たちに何ができるだろうか、何かしたい、なんとかしたいと思っている人たちが多くいることに気がきました。

今回、無事に届けることができたのでお知らせしたいと思います。

(加藤千晶・萩原葉子)

▲チャリティー展会場の様子  
◀(上段) 作品を鑑賞する来場者(下段) ぼろ市の様子。陶芸やガラス専攻の学生の作品も並んだ。



▲原町高等学校 美術部の皆さんと女子美メンバー

### 原町高等学校へ

義援金の支援先は福島県、相双地区高等学校美術連盟(原町高校・相馬高校・相馬東高校・新地高校・浪江高校の美術部による連盟)に贈呈することにしました。連盟の代表校の原町高等学校は大学院洋画研究領域2年の坂内直美先生の恩師(朝倉先生)がいらっしゃる所で、以前より被災地支援について相談をさせて頂いてました。震災後に画材などの支援を頂いたが美術教育の費用は減少しており、厳しい状態が続いているとの事でした。右の集合写真でもわかるように、とても元気な生徒さん達に義援金を使ってもらえたらと考え、朝倉先生のご助言を頂き連盟に贈呈することになりました。

## 南相馬市に義援金を渡しにに行ってきました！

受け渡し当日、通行解除された国道6号線の津波浸水区間を通りました。車窓から見える景色は震災から3年半たったとはいえ、津波の痕が痛々しく残っていました。海水により茶色くなった土地、荒れた土地に生い茂るセイタカアワダチソウ、人影のない風景には何とも言えない恐ろしさを感じました。そんな土地から車で30分ほどの街で支援先の学生達が生活している様子が、生きる強さを感じました。

原町高等学校では美術部の生徒たちがテスト期間中にもかかわらず、私達を暖かく迎えてくれました。義援金の入った封筒を受け取った生徒は封筒の厚みと重さに驚き、生徒が読み上げた金額に美術教師の朝倉先生がなにより一番驚愕していました。朝倉先生は受け取った義援金を大切に長く使っていきたいとおっしゃっていました。

その後、生徒たちと触れ合う時間を設けることができました。以下学生の感想です。

生徒達から「制作をする中での苦労は?」「好きな画家は?」などの質問があり、私達からは「生徒達が今興味を持っていることは?」や「授業や部活でどんなことをしているのか?」等の質問をしました。和やかな雰囲気の中で行われる交流会では、はつらつとした姿とともに、真剣な姿勢も見えとてもいい学校、そしてとてもいい生徒達だと感じました。(多良舞利恵)

恥ずかしそうにしつつ作品も見せてくれたり、予想以上にたくさん話せてとても楽しい時間を過ごしました。自分の楽しい高校時代を思い出して懐かしい気持ちと、同じく楽しそうな生徒たちの姿にとっても嬉しい気持ちを抱きました。(榎本彩乃)

震災から3年半が過ぎて、被災した地元へ何ができるのか悩んでいましたが、作品を通して地元へ支援することができて嬉しかったです。生徒達の笑顔と真剣にキャンパスに向かう表情から、あの日のことを忘れずに前を向いていく元気をもらいました。(坂内直美)

美術部連盟へ贈呈するという事で、同じ美術に志を抱く者として是非活用して欲しいと思うと同時に、これをきっかけに、交流を深めていけたらと思います。例えば、高校生を女子美に招いたり、高校生(連盟)の作品展を女子美で開催したり、今後も女子美との関係を何らかの形で築けていけたらいいなと思います。



▲大森先生と原町高等学校の朝倉先生



▲警戒区域を走る道路、六号線



▲義援金を渡す瞬間



▲警戒区域の中の無人のガソリンスタンド

### 南相馬の若きアーティストに出会う

チャリティー展も今回で4回になった。2年目は岩手県田老町、3年目は福島県南相馬市のじゃぶじゃぶ池プロジェクト、そして4年目の今回は南相馬市の県立原町高等学校に訪問してきました。

当初から義援金を直接手渡しすることで、復興の現状を知ること、そしてその後の復興の様子と活動により一層の関心を持つことにつなげていければという思いから今回も車で現地を目指した。常磐道を降りてから富岡町、大熊町、双葉町、浪江町を通過し、南相馬市に到着した。

その車窓からの眺めは、無意識のうちに複雑に私のなかに入り込んで未知の景色の記憶となり、その後の数日間毎晩私に悪夢を見させた。福島で日々復興を目指している方々を思うと非常にデリケートな問題でもあるので、個人の感じ方として受け取って頂きたい。帰還困難区域の国道脇の道という道、家という家にフェンスがたてられ、その先に草木に覆われた付かずの震災時が残っていた。更に道沿いに突然出てくる看板には、獣に注意、牛に注意とあり、動物じゃない得体の知れない生物を想像したり、瀕死の牛がヨタヨタと現れるのかなどと不安になった。初めて見るその景色は私が生きている日本なのか疑わずにはいられないものだった。本当に何ができるのだろうか。原町高等学校のみなさんはこちらのメンバー皆が自然と笑顔になるような歓迎をして下さった。女子美術大学の学生、教職員やその家族、そしてチャリティー展で作品や商品を購入してくれた一般の方まで、多くの方が一日も早く復興することを願っていることをお伝えした。美術室には、全国高等学校総合文化祭を目指し制作中のたくさんの絵画作品があり、美術大学や作品制作について互いの話で盛り上がった。

あっとい間の交流の時間でしたが再会を誓い学校をあとにし、昨年協力させて頂いたじゃぶじゃぶ池に立ち寄った。子供たちの水遊びのシーズンは過ぎていたので静かだったが、綺麗に管理された公園と池は夏にはたいへん賑わっていたとのことと街にも馴染んでいるようで安心した。

帰路、車を運転しながら畠山美由紀さんの『わが美しき故郷よ』という宮城を綴った詩の朗読を何度か頭のなかで思い出し、福島の色に重ね合わせ一人ひとりの故郷に穏やかな時間が訪れるよう願うとともに、そのための小さな力としてこれからもチャリティー展のような活動の輪を広げようと思った。最後になりましたが、今回チャリティー展・ぼろ市に関わりご協力頂いた方々に感謝するとともに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

(女子美術大学 洋画研究室 大森悟)